

基地と聖地の沖縄史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山内, 健治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20920

2019年12月19日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 政治経済学部 専任教授

氏名 石川 雅信 ㊞

(副査) 政治経済学部 専任教授

氏名 土屋 光芳 ㊞

(副査) 政治経済学部 専任教授

氏名 牛山 久仁彦 ㊞

(副査) 首都大学東京 名誉教授

氏名 高桑 史子 ㊞

1 論文提出者 山内 健治

2 論文題名 基地と聖地の沖縄史

(英文題) Ethnography of Forced Relocation Villages and Sacred Places Within and Surrounding U.S. Military Bases in Okinawa

3 論文の構成

本論文は序章に当たる「はじめに」に続き、本論の1～4章、結論部分に当たる「おわりに」の全6章によって構成され、末尾に「あとがき」、注、主要参考文献一覧が付されている。

はじめに—基地と聖地とは何か

第一章 強制移転村の聖地—楚辺

第一節 米軍の上陸直後—読谷村の戦争被害

第二節 読谷村の戦後の集落移動

第三節 移転とシマの再生

第四節 強制移転後の集落と新・旧聖地の二重性

第五節 旧集落内の聖地の過去と現在

第二章 基地返還地の聖地の再生と共同体

第一節 宇座の移動及び返還後の帰村

第二節 宇座の聖地の再生と継承

第三節 コミュニティの再生と現在

第三章 基地の中の町—北谷の聖地と郷友会

第一節 北谷町と基地の歴史

第二節 キャンプ端慶覧内の聖地

第三節 キャンプ桑江基地周辺の聖地と移転

第四節 基地に消えた集落—下勢頭—

第四章 基地接収と爆音被害のムラ—砂辺・戸主会と聖地

第一節 旧砂辺の概要

第二節 砂辺戸主会と自治会

第三節 砂辺の聖地

おわりに

あとがき

主要参考文献

4 論文の概要

著者は「はじめに」において本論文の目的を米軍基地内および基地周辺に存在する聖地・信仰の空間的記録とその文化継承の様相を分析することにあるとしている。戦後、米国統治下の時代、基地強化の続いていた沖縄の軍事環境下で、昔ながらの民俗文化はどのように継承されてきたのか、また、将来、地域共同体に受け継がれてきた民俗文化の意味や記憶はどのような方向に向かうのか、当該地域の人々の生活と、信仰の対象である聖地のあり方を記録し沖縄戦後史に残すことを目指している。

従前の沖縄研究が取り扱ってきた課題を整理し、以下の6項目にまとめている。

- 1 フェンスの内と外の世界観→聖地と神人の継承と祭祀行事
- 2 土地・屋敷・墓・位牌の相続・継承と「軍用地」の関係
- 3 郷友会の成立と自治会の共存
- 4 旧集落地図ほかの復元作業と現在の市町村合併問題
- 5 米軍軍属家族と沖縄人の婚姻問題（アメラジアン問題ほか）

6 基地接收と戦後の海外移民

これらの課題を勘案しながら、本論文の主な調査課題を沖縄米軍基地の内と外に存在する聖地の記録とその祭祀継承を維持する共同体（自治会・郷友会・個人）の活動、および移転村におけるコミュニティの再生・創造に関するデータ分析を行うこととしている。

また、戦後の沖縄で基地接收により移転を余儀なくされた旧集落のパターンを以下の4つの型に分類し、それぞれのパターンの聖地と共同体の過去と現在について記述している。

- 1 強制移転させられたままの集落
- 2 村落の一部を接收されたままの集落
- 3 軍用地接收地域を返還された集落
- 4 基地の中に消えた集落

沖縄の戦後史において、十分に記録されてこなかった米軍基地の内と外に祀られてきた墓・火の神・川の神・井戸の神・土地の神他の多くの神々が戦後いかに祭祀されてきたのか、また、それを継承する個人・共同体について比較研究している。

第一章「強制移転村の聖地—楚辺」では沖縄県読谷村の戦争被害とその後の強制住民移転、“銃剣とブルドーザー”による土地収容の歴史を記述し、戦後、強制移転したままの集落の共同体と祭祀の状況をまとめている。強制移転に伴う米国政府による損失補償と村民の嘆願・交渉および、新開地での村落共同体の再生と個別のライフヒストリーを社会史とともにまとめている。また、創設された二つの聖地（旧集落＝米軍基地内）と新集落で創設された聖地の維持・継承に関しての楚辺自治会（公民館）活動や軍用地料について分析した。本章の末尾には陸軍特殊部隊の常駐配備された基地内の聖地と住民の年中行事の遂行を記録し、強制移転村の社会構造と伝統文化・聖地の保存の問題を記述・分析している。

第二章「基地返還地の聖地の再生と共同体」では戦後、帰村できないまま米軍用地として接收、1970年代より次々に解放された宇座集落のコミュニティの現在を論じている。同集落は戦後、集落のほぼ全てを接收された。戦後、各地に分散して旧宇座住民は他集落である高志保・長浜地区に帰村し1952年公民館を建設し、多くの旧宇座住民は現在も長浜地区に共住する。1976年に旧集落が全面返還され、旧集落地の住宅が整備された。こうした経過の聖地の再生（墓・火の神・水の神・ノロ神等の御嶽祭祀場）と伝承を記録し、距離を隔てた新・旧二つの集落が併存する一つのコミュニティ（公民館）の二重性の問題を分析している。

第三章「基地の中の町-北谷の聖地と郷友会」では今なお町内面積の約52%を米軍施設に接收されたままの北谷町をとりあげている。本章では、旧村落の合祀所の聖地、一部返還地に新たに整備され始めた地区の聖地、および基地内にある合祀所、さらに1954年以降に米軍施設から解放され帰村した村落自治会と郷友会の組織を記述分析している。対象とした聖地は広大な米軍基地・施設内に点在する旧村落の聖地・拝所の合祀所であるが、基地内でも立ち入り規制の強いエリアであるため、これまでも市町村歴史編纂室・教育委員会の断片的な記録があるのみであった。著者は基地内の聖地を、基地内外で行われている民間信仰の行事遂行の参与観察と共に記録し、詳細な資料分析を行っている。

第四章「基地接収と爆音被害のムラー砂辺・戸主会と聖地」では沖縄戦後、米軍により全面接収を受けた集落が、その後返還されたにもかかわらず、空軍機の爆音被害によって半数以上の世帯が再び集落を離れた砂辺地区を記述・分析している。旧砂辺地区の一部は、現在も米国空軍嘉手納基地及び陸軍補給施設に接収されている。この章では帰村した旧集落民により結成された戸主および分家戸からなる砂辺戸主会による村落整備と社会構造の変化、帰村後の集落のスプロール化現象、土壌汚染問題と自治会活動、軍用地料の戸主会管理下での聖地再興と年中行事の遂行について記述し論じている。

結論部分である「おわりに」では、聖地の保存や祭祀行事の継承を担ってきた個人・共同体、自治会や故郷を離れて結成された郷友会の研究についてまとめている。戦後の沖縄における土地接収・基地問題と文化を扱った諸論考を検討しながら人類学と社会学の結節点と相違について論じている。強制移転を余儀なくされた住民の基地返還運動、島ぐるみの土地闘争、基地化によりかつての村落共同体を消失した後も聖地への巡礼や年中行事を慣習的に遂行する人間関係などを<実践的コミュニティ>として捉え再考している。そして米軍上陸により破壊、強制移転、軍事環境下に置かれ続けた沖縄におけるコミュニティの現在は、その奪われた故郷の奪還運動であると同時に過去の<シマ>の時間・空間への回帰を意図した文化継承・再生の活動であると結んでいる。

5 論文の特質

本論文の特質は次の三点に集約できる。第一点はこれまで調査研究がほとんど行われてこなかった沖縄の米軍基地の存在と、沖縄の人々の信仰生活を結び付けて多くの映像とともに記録、分析したことである。第二次世界大戦後、沖縄は米軍に統治され、住民の生活領域は基地のフェンスで分断された。沖縄には巨大な亀甲墓や御嶽（ウタキ）や火の神（ヒヌカン）と呼ばれる聖地が多数あることが知られているが、それらの聖地は基地内にも残された。また、米軍は新たに接収を行う一方で、それまで接収していた土地の返還も行なった。このように住民の生活に加えられた圧力は信仰生活にどのような影響を与えるのか本論文は克明にその様相を分析している。

第二点は研究対象を移転村に集中させたことである。著者はこれまでの沖縄地域における人類学的、民俗学的研究の多くが沖縄文化を日本文化の「原郷」とみる視点に基づいていて、いきおい定住村における伝統文化や社会制度に関心が集中しがちであったと指摘する。沖縄の現実を直視するためには基地によって生活に大きな影響を受けた人々に目を向けることが不可欠であるという立場をとっている。

第三点は軍事施設の内外での住民生活を20年という長期にわたるフィールドワークで得られた資料を基に論じていることである。機密保持が求められる軍事施設の調査には様々な困難が予想されるが、本論文では著者の粘り強い調査で得られた資料によって基地と、住民の信仰生活の様相が複数の地域について記録、分析されている。

6 論文の評価

本論文が高く評価される第一点は独創的研究視点である。本論文は当該研究領域における空白領域ともいえる軍事施設と伝統文化（信仰生活）を結び付けた労作である。一般に軍事関連の調査は難しく、得られる情報に制約が大きいため研究対象から外されることが多かった。著者はこのような課題に積極的に接近し、これまで知られることの少なかった基地周辺の住民の生活実態を明らかにした。

第二点は本論文の資料的価値である。基地は種々の社会問題の要因となるが、軍用地料などの利権も生む。基地のフェンスはその内と外を隔てる嚴重な壁である一方、「黙認耕作地」（基地内であるが事実上沖縄住民の耕作が許されている土地）などのグレイゾーンもある。基地と住民、また住民同士、さらに基地、住民、自治体との関係は複雑な様相を呈する。

著者は長期間にわたる継続的なフィールドワークによって基地周辺の沖縄住民の生活を克明に描き出し分析している。長期にわたる軍用地使用によって共同体が分断された結果、存在意義が曖昧になったり、伝承が途絶える可能性のある聖域や信仰形態を記述しようとする一貫した姿勢は、失われゆく地域文化を記録するというアカデミズムに課せられた任務を遂行するという意味で大いに評価することができる。

審査の過程で沖縄のコミュニティ研究について、より詳細な先行研究の検討を付すことができないか、また、結論部分に一部曖昧な表現があるなどの指摘があった。しかしながら本論文の独創的な研究視点と展開された分析の資料的価値は上記の指摘を補ってあまりあるものと審査委員の意見が一致した。沖縄地域研究、沖縄史研究にとって十分に価値のある論文と判断する。

7 論文の判定

本学位請求論文は、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び試験に合格したので、博士（政治学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上